

【総説論文】

教科評価論

島田 功（日本体育大学）

本特集は、「教科評価論」のシラバスについて各教科の視点から論究したものである。すなわち、①評価方法の先行研究を収集する、②それらの評価方法の工夫を分析する、③新しく構想した評価方法を授業で検証する、④評価の目的を分析し、併せて評価の機能、対象、主体性など評価に関わる多様な側面について考察するという4視点のいずれかからとらえ、論究したものである。

キーワード：評価方法の先行研究，評価方法の工夫，新しく構想した評価方法の検証，評価の目的と多様な側面

Subject Assessment/Evaluation Theory

Isao SHIMADA (Nippon Sport Science University)

This special issue discusses four syllabuses of "subject assessment/evaluation theory" from the viewpoint of each subject: First, collecting prior researches on assessment methods; second, analyzing ideas of those assessment methods; third, verifying assessment methods newly designed in class; and fourth, analyzing the purpose of assessment/evaluation, and the function and independence of the assessment/evaluation.

Key Words: Collecting prior researches on assessment methods,

Analyzing ideas of assessment methods,

Verifying assessment methods newly designed in class,

Analyzing the purpose of assessment/evaluation

1. はじめに

「教科評価論」の授業の到達目標として「各教科において評価の目的や方法を構想し、構想した計画を授業実践で検証すること」を挙げ、この目標を達成するために授業の概要として、

- ①「代表的な評価方法を収集する」、
- ②「それらの評価方法の工夫を分析する」、
- ③「新しく構想した評価方法を授業で検証する」を扱うことにしている。更に、
- ④「評価の目的を分析し、併せて評価の機能、対象、主体性など評価に関わる多様な側面について考察する」を挙げる。④は、授業目標とも関連し、①から③を考察する上での基盤を成す。

なお、④に関わって「各教科における評価の目的」の意味を2つの視点から解釈したい。一つ目は、各教科でどのような子どもを育成するのか、どのような力を育成するのかという教育の目的や目標に関係する評価である。二つ目は、評価一般論における評価の目的である。

各教科の論文はこれらの①～④において、表1に示す見地からそれぞれ論述している。

なお、この表の○印は、当該項目を示す。以下、各教科の論文を上記の①から④の視点から概説する。

2. 各教科の論文の概説

2.1 国語科

戦後我が国の国語科において展開されてきた教育評価及び教育評価研究を、学習指導要領の変遷や全国大学国語教育学会開催によるシンポジウム等の資料を基に通時的に概観し、その中から今日の国語科

において取り組む必要のある評価に関する課題や論点を析出・整理している。さらに、それら析出した課題や論点を基に、国語科における評価の特質を検討し、諸外国の母語教育における評価研究や学力調査、さらには読解過程への教育実践的な見取りやその方法を事例として検討して、我が国の国語科教育における今後の教育評価及び教育評価研究に資する観点や工夫を考察している。

シラバスの①と②の視点から考察すると、3つの評価事例が収集されている。一つ目はアメリカ合衆国で実践されているNAEP(The National Assessment of Educational Progress)と呼ばれる全米学力調査の中の「読解 (reading)」の評価の枠組みや設問の作り方が取り上げられている。この評価方法の工夫として1点目は性質の異なる二種類の調査を組み合わせることで読解力を調査している点であり、2点目は、読解力を調査するために、4つの読みの観点を提示して設問作成も評価も行っている点である。評価事例の2つ目として、文章の複雑な読解過程の評価に関連して欧米を中心に于行われている学習者用図書レベル分けが取り上げられている。この評価方法の工夫として、レベル分けの枠組みを活用して、学習者の読みの実態を的確に把握しそれを基盤として適切な指導を行っている点である。3点目の評価事例として、オーストラリア連邦・クィーンズランド州で取り組まれているニューベーシックス・プロジェクト(NBP)の評価方法及び学習目標との関連・設定方法の工夫である。具体的な評価方法の工夫として、学習課題・学習目標・評価観点の設計の仕方である。特徴的なのは複数の評価項目を織り込ん

表1 各教科と①～④の見地の関係(筆者作成)

	①評価方法の収集	②評価方法の工夫	③評価方法の開発と検証	④評価の目的等(対象、機能等)
国語科	○	○		○
社会科	○	○	○	○
算数科	○	○	○	○
体育科(岡出)	○	○		○
体育科(近藤)	○	○	○	○

だリッチタスクス (RT) と呼ばれるプロジェクト型の学習課題が開発され、開発された RT (RTシート) を用いたり、グレーディングマスターという評価方法を用いたりして授業と評価の一体化¹⁾が図られている点である。

今後は、本稿の検討で得た海外事例に見る方策や工夫を、我が国の国語科における評価に援用し、具体的な単元の開発やその評価に活かしていくこと(シラバス③の研究)が残されている。

2.2 社会科

社会科の評価に関して、歴史的経緯を踏まえて、代表的な評価方法を概括し、特に新しい評価方法としてのパフォーマンス評価を検討し、その評価を用いた授業実践例を紹介している。社会科の評価の目的は、社会認識を通じた市民的資質を育成することを評価することであるとしている。

シラバスの①と②の視点から考察すると、2つの評価事例が収集されている。一つ目は、池野(2006)の向上主義的学力論に基づく評価論である。池野は、ブルーム目標分類表に依拠した学力論の問題点を「要素への分解と階層段階化」として批判し、3つの問題点を指摘している。そして、PISA 調査や英国ナショナルカリキュラムに見られる評価論の特質を明らかにし、学習者の認識変容を見取る向上主義学力論を提唱する。向上主義学力論による評価方法として、ツールミン図式を用い学習内容を段階化し認識変容を評価する方法を挙げている。向上主義的学力論に基づく評価論の具体的な例として小学校の地図学習が紹介されていて、そこでは児童の認識変容(見方・考え方の変容)をプレテスト、ポストテストによる評価問題を通じた質的分析、傾向性分析法が用いられている。

二つ目は、パフォーマンス評価である。佐藤ほか(2017)や大山(2017)や坂井(2011)の例が紹介されている。佐藤ほか(2017)のパフォーマンス評価では、評価の工夫として自己評価とペーパーテストを掛け合わせて用いられている点を挙げ、大山(2017)のパフォーマンス評価では、評

価の工夫として自己評価と相互評価を主軸に能力育成を行っている点を挙げ、坂井(2011)のパフォーマンス評価では、評価の工夫として思考のプロセスを評価している点を挙げている。

シラバスの③に関わる「新しく構想した評価方法を授業で検証する。」については、田本ほか(2010)の例「佐賀市まちづくりについて考えよう」(第6学年、第3学年)が紹介されている。第6学年の例では、先述したツールミン図式を用い学習内容を段階化し認識変容を評価する方法が用いられている。

2.3 算数科

評価の目的等を明らかにするために戦後の学習指導要領一般編(試案)に見られる教育評価の精神を概括している。更に「思考力・判断力・表現力等」や「数学的な考え方」や「数学的思考力」について考察し、数学的モデリングの評価に関わる先行研究を析出し、更に新しく構想した評価方法を授業で検証している。

シラバスの①と②の視点から考察すると、3つの評価事例が収集されている。一つ目は島田(1977)の「オープンエンドな問題」を用いた評価研究であり、二つ目は松下(2016)による「パフォーマンス課題」による評価研究であり、三つ目は文部科学省(2007)が取り組んだ「全国学力・学習状況調査B問題」の実態調査とその評価研究である。シラバス②「評価方法の工夫」では、島田(1977)の評価研究では、問題に内包されている多様性と形成的評価方法を用いた工夫(坪田, 1988), 松下(2016)の評価研究では、ルーブリックを用いた評価方法の工夫、文部科学省(2007)の評価研究では、自由記述分析の基準作りと形成的評価を用いた評価方法の工夫等を抽出している。シラバス③「新たに構想した評価方法の授業による検証」では、島田(2017a)や Shimada & Baba (2016)が考えた「社会的オープンエンドな問題」を用いた研究を紹介している。その中では「真正の問題」を取り入れた授業が実践され、子ども達から表出する多様な数学的思考力や多様な価値観を形成的

評価や記述分析法を用いてそれらの変容を評価している。

2.4 体育科Ⅰ（岡出論文）

体育科における評価対象を結果としての技能や体力の査定だけではなく、新学習指導要領において示されている学びに向かう力、人間性も考察の対象にしている。また、学習指導のための評価²⁾（AfL: Assessment for Learning）という概念を重視して論文が構成されている。この概念のもとで求められる評価は、期待する成果と評価法の一貫性の確保、児童、生徒との成功基準の共有等を特徴とするとともに、授業改善に向けた継続的で形成的評価を求めている。この学習指導のための評価という考え方に基づく授業改善には、期待する学習成果に対応した多様な評価法を学習指導過程に組み込むとともに、その結果を授業改善やカリキュラム評価に反映させていく取り組みが求められるとしている。更には、授業で期待する成果と評価法を最初に設定し、学習指導方略を検討する逆向き設計の考え方も重視している。

シラバスの①と②の視点から考察すると、3つの評価事例が収集されている。一つ目は、アメリカのナショナルスタンダード開発過程で見られた標準的なテストに代わる代替的な評価法（Alternative Assessment）としてのポートフォリオ、論議、ディベート、イベント・タスク、事例研究、ログ、ロールプレイである。このような評価法の工夫（特徴）として以下の5点が示されている。1）教師が測定したいと考えている行動を直接検討する課題を設定している。2）パフォーマンスの結果と質に焦点化されている。3）目標標準の得点システムとなっている。4）最終成果物の獲得に向け、生徒が評価項目の開発に参加するとともに、それにオーナーシップをもつ。5）評価基準は事前に生徒に提示される（NASPE,1995,p.107）。二つ目はアメリカにおいて提案されたスポーツ教育モデル（Hasite, 2012; Siedentop, 1994, Siedentop et al.,2011）やナショナルスタンダードに対応した評価法として

のPE・Metricsである。いずれも、社会、情意領域を評価するために開発された評価法である。後者の評価法の工夫として、項目反応理論による知識レベルを評価する認知テストが用いられている点である。三つ目はパフォーマンス評価法である。この評価法の特徴は、技術の選択やゲーム状況に応じて技能を発揮することを求める等、スキルテストでは測定評価できない、技能の応用能力を評価できる点である。

2.5 体育科Ⅱ（近藤論文）

体育授業における教師の指導や児童生徒の学習の成果を分析・評価することについて論じている。とりわけ、行動観察に限定してその代表的な手法を紹介している。体育科で行われている教師の指導行動や児童生徒の学習行動は、外見上の行動という形で顕在化されやすいという特徴を持つ。そのため、こうした行動を量的に把握し、評価していくことにより、様々な行動改善の示唆を得ることが可能となっている。

シラバスの①と②の視点から考察すると、教師の行動観察評価法と児童生徒の行動観察評価法の2つが収集されている。一つ目の教師の行動観察評価法は、体育授業中の教師の行動を観察評価するものであり、特に教師と児童との相互作用に焦点を当てている。相互作用の多様な機能のうち、児童の学習に大きな影響を与えるフィードバックの働きに注視している。そのための評価の工夫として、「教師の相互作用行動の観察カテゴリーとその定義」や「教師の相互作用行動の観察シート」を用いている点である。二つ目の児童生徒の行動観察評価法は、二例が紹介されている。一つ目は、投げる動作についての評価法である。この評価法の工夫は、投げる動作を分析的に捉え指標化している点である。「投動作の観察的評価基準」（滝沢ら, 2017）のような評価基準表を用いている。二つ目は、ゲームパフォーマンス評価である。ゲームパフォーマンス評価とは、実際のゲーム場面でのどのような動きをするかを評価するものである。「ボール操作」と「ボールを持たない時の操作」

の二つの視点で評価している。そのための工夫として、「レシーブの分析カテゴリー」等のパフォーマンス評価のための指標を準備し評価している点が挙げられる。

3. まとめ

以上、各教科の論文を以下のように「教科評価論」の授業の目標や授業の概要などのシラバスの視点に基づいて概観してきた。

「教科評価論」のシラバスにおける授業目標は、「各教科において評価の目的や方法を構想し、構想した計画を授業実践で検証すること」であり、この目標を達成するために、授業の概要としての次の4つを挙げて考察した。

- ①評価方法の先行研究を収集する。
- ②それらの評価方法の工夫を分析する。
- ③新しく構想した評価方法を授業で検証する。
- ④評価の目的を分析し、併せて評価の機能、対象、主体性など評価に関わる多様な側面について考察する。

これまでの概観を踏まえると、本論文は次の6点に総括できる。

(1) シラバス①の「評価の先行研究の収集」と④の「評価の目的」について

各教科の評価の目的（各教科で育成したい力）を明確にしてそれを評価する方法を収集している。

例えば、国語科では読解力の育成を中心とする評価方法の収集、社会科では社会認識を通した市民的資質の育成のための評価方法の収集、算数科では数学的思考力育成（数学的モデリング）のための評価方法の収集、体育科Ⅰでは、学びに向かう力、人間性涵養のための評価方法の収集、体育科Ⅱでは、教師の授業中における行動（相互作用場面）と児童の動きの評価方法の収集を行っている。

(2) 静的な知識理解に留まらない真正の文脈における総合した力をみる評価について

全ての論文に共通しているのは、国語科であれば漢字の読みや書き等の静的な評価ではなく、社会科であれば社会に関わる静的な知識理解の評価

ではなく、算数科であれば計算技能や公式等の静的な知識理解の評価ではなく、体育科であればドリブルやシュートができるかどうかという静的な技能に関する評価ではなく、それらを活用して問題解決する場面を構成して総合した力を評価しようとしている。その場面として、全ての論文で共通している評価法として、パフォーマンス評価が挙げられている。これは、真正の場面における評価が注目を集めている証左である。

(3) シラバス②の「評価方法の工夫（特徴）」について

全ての論文においてシラバス②の「評価方法の工夫（特徴）」を分析している。例えば、図書のレベル分けや認識レベルの指標化や動きの評価基準作りや自由記述分析の基準作り等のスタンダード準拠評価（standard-referenced assessment）や形成的評価を用いて指導と評価の一体化を図る方法や発問分析、子どもの認識や思考の変容分析（プレテストやポストテストによる質的分析や量的分析による評価、自由記述分析による子どもの思考の多様性の評価）等が見られる。

(4) シラバス③の「新しく構想した評価方法を授業で検証している」ことについて

社会科、算数科、体育科Ⅱは、シラバス③の「新しく構想した評価方法を授業で検証している」例を紹介している。いずれもパフォーマンス評価に関わるものであり、社会科は池野（2006）の向上主義学力論によるツールミン図式を用い学習内容を段階化し認識変容を評価するパフォーマンス評価が用いられ、算数科は、馬場（2007）の社会的オープンエンドな問題を具体化した島田（2017）によるパフォーマンス評価が用いられ、体育科Ⅱでは実際のゲームを想定したゲームパフォーマンス評価が用いられている。

(5) シラバス④「評価の目的」の二つ目の意味解釈である評価一般について

「評価の目的」の二つ目の意味解釈に関する評価一般について、各論文の中で随所に見ることができる。例えば、「児童の学習の改善のため」「教師の指導改善のため」「教授や学習のプロセスを明

らかにするため」等である。ここではそれらをまとめる意味で、戦後の文部省（1951）の評価に対する次の5つの考えを紹介してみたい。i) 評価は、児童の生活全体を問題にし、その発展をはかろうとするものである。ii) 評価は、教育の結果ばかりでなく、その過程を重視するものである。iii) 評価は、教師の行う評価ばかりでなく児童の自己評価をも大事なものとして取り上げる。iv) 評価は、その結果をいっそう適切な教材の選択や、学習指導法の改善に利用し役だてるためにも行われる。v) 評価は、学習活動を有効ならしめる上に欠くべからざるものである(文部省, 1951, pp.217-219)。

(6) 「教育評価」に関する今後の課題について

最近の動向では、「学習のための評価 (Assessment for Learning)」と「学習としての評価 (Assessment as Learning)」が強調され、この視点で評価を再考する動きを見せている。「学習のための評価 (Assessment for Learning)」では、学習改善のために子ども自身が評価活動へ参加し、「学習としての評価 (Assessment as Learning)」では、評価活動自体を学習の機会として捉えていく(西岡ほか, 2016) ことである。こうした視点でも教育評価を再考していきたい。

最後に、最も大事なこととして教師が行う「教育評価」の底流には、一人一人の子どもへの深い愛情と教育への強い責任意識が流れていて、このことがあって初めて生きた「教育評価」になるこ

とを忘れないようにしたい。

註

1) 国語科の評価観は、昭和40年代に入って、「指導と評価の一体化」として具体的に検討されるようになり、平成10年以降今日まで、「指導」に学習者間の対話的視点を加えて「授業と評価の一体化」の問題として、継続的に取り組まれてきている。奥泉論文では、このように「指導」に学習者間の学びを加えた意味で「授業と評価の一体化」という表現が用いられている。

2) 岡出論文で用いられている学習指導のための評価 (AfL: Assessment for Learning) とは、学習成果の評価 (Assessment of Learning) と対置して用いられており、学習成果の評価が学習の結果を評価するのに対して、学習指導のための評価は学習の過程で学習の改善を意図して実施されるという意味で用いられている。また、学習の改善を目指す過程では、生徒との目標の共有化の過程が設定されている。

引用・参考文献

(各教科の論文の概説を除く)

文部省(1951) 『初等教育の原理』 pp.217-219.

日本体育大学大学院教育学研究科(2017) 『設置の趣旨等を記載した書類』 p.3.

西岡加名恵・石井英真・田中耕治(2016) 『新しい教育評価入門』有斐閣コンパクト, p.7.